

障害のある子どもの発達と“どろんこあそび”実践

——土・水（泥）という天然素材の有効性の分析を中心に——

吉 田 幸 恵
稲 垣 馨

はじめに

現在、子どもの成長・発達を取り巻く社会、そして自然環境は急速に変化している。特に、わが国では里山など、かつての豊かな自然環境が失われつつある。一方、幼保一体化が目前に迫る中で、わが国の保育は、人間としての基盤を培うという役割と小学校就学の準備教育という矮小化された役割の間でせめぎ合っている。そのような混乱の中、保育現場では、十分な検証をなさないまま読み書き・英語などの早期教育を取り入れるという実態が進行している。そして、それらに伴うようにして、子どもの生活の質、とりわけ遊びの質が変化し、子どもの心とからだの成長・発達に様々な影響を及ぼし始めている。また、それに対する危機感から、人間としての基盤を培うことを重視し、意識的に自然を活用した保育（以下、自然保育）を積極的に展開している園（施設）も存在する。

そもそも、保育において自然が重要であるということは、自明のここのようである。その証左として、「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」ではともに、乳幼児期に自然とかわるここの重要性を謳っている。また、16世紀に活躍した教育思想家 J.J.ルソー、17世紀に活躍した経済学者として著名な思想家 F.エンゲルスなど、近代の思想家たちによっても、すでに人間の発達における自然の意義は指摘されてきた。しかし、上記の通り現在では、自然破壊が進行するとともに、自然を活用した保育の意義が見失われていく実態が進行している。そこで、自然保育の現代的意義を問い直すことが必要であると考ええる。

本研究の目的は、自然保育が子どもの心とからだの育ちに及ぼす影響を探るため、自然保育の実践を分析・検討し、その有効性を再確認することである。そのために、何十年と自然保育の実践を蓄積してきたが、その成果に未整理の部分がある幼稚園・保育所・障害児施設を研究対象として協力を仰ぎ、その自然保育実践を整理・分析し、理論化していく作業に取り組んでいる。

本稿は、その一部を報告するものであり、知的障害児施設である C 施設の“どろんこあそび”

実践に焦点を当て、障害をもつ子どもの発達と“どろんこあそび”との関連を分析することを通して、“どろんこあそび”ならびに天然の素材である土や水（泥）そのものが、子どもの育ちにとってどのような効果があるのかについて考察した。

“どろんこあそび”は土や水（泥）を使って行われる遊びであり、保育現場では広く実践されている。“どろんこあそび”は、生命を育む土に直接触れるという自然体験でもある。比較的幅広い年齢の子どもが遊べ、また、都会で森林や里山等が少なく自然体験が難しい地域でも、手軽に土を介して自然を体験させることができるという特徴がある。“どろんこあそび”は、身近であるからこそどのような意義があるのか再確認する必要がある。

なお、本研究は、上記執筆者に加え、はちまん幼稚園園長竹川雅子、あさひおつき保育園園長渡辺三保、名古屋経営短期大学子ども学科所属の穂丸武臣、栗山陽子、陳恵貞、山田隆幸、藤林清仁による共同研究である。

1. 研究方法

(1) 対象

研究対象は、A 市内にある知的障害児通園施設（C 施設）である。子育て家庭が比較的多く住んでいる地域に立地し、実践の積み重ねがある。施設の概要は、以下の通りである。

【C 施設】

種別：知的障害児通園施設

定員：20 人（おおむね 2～5 歳の乳幼児）、生活年齢を基本に 3 クラス構成、親子通園と単独通園を実施

設立年：2003（平成 15）年（前身となる知的障害児通園施設 A 市立 C 学園は 1966 年設立）

施設の周辺環境：広々とした河川敷のもとに位置し、A 市内の住宅地にありながらも比較的緑と自然がゆたかである。

園の特色（自然保育に関して）：都市部の立地であるが、外あそびを積極的に行っている。外遊び園庭には「どろんこひろば」と呼ぶ場所があり、存分に泥あそびが楽しめる。四季を通して自然に触れること、本物に触れる経験を大切にしており、散歩や畑作りは積極的に実施、年間を通しては、潮干狩りや海水浴、スキー場でのそりあそび、ホースセラピー（牧場で乗馬を楽しむ）お父さんとの体験（マスカみ、山登り）など、親子が共に楽しみを味わえる取り組みを実施している。

C 施設では、外あそび、なかでも“どろんこあそび”を積極的に行っている。多くの知的障害児施設では、感覚統合のあそびが室内で行われるなかで、特徴的であるといえる。

(2) 方法と期間

研究方法は、おもに、研究対象である施設の保育者の観察記録を、田中昌人の階層一段階理論を活用して分析するという方法を採用した。また、実践をビデオやカメラで記録したものの反復

視聴も行い、分析の手がかりをつかんだ。

2009（平成 21）年 10 月～11 月にかけて、ビデオカメラで撮影し、記録した。その後、反復視聴と分析を行った。その後、保育者の記録と照らし合わせながら検討した。

（3）倫理的配慮

倫理的配慮として、ビデオカメラやカメラでの撮影による記録を実施する際には、研究対象施設の施設長に、調査の趣旨とともに得られたデータは個人情報の厳重な管理と適切な処理を行い、研究以外の目的には用いないという説明を添え協力を依頼した。また、本文中に掲載されている子どもの写真や事例については、その子どもの保護者に施設長を通して了解をとった。調査結果は、本論文を研究対象施設に送付することにより開示する。

2. C 施設の“どろんこあそび”実践

（1）C 施設の願いと“どろんこあそび”

C 施設では、障害ゆえに弱さを持っている子どもたちだからこそ豊かな発達を促すために、障害種別に関わりなく、同年齢の健常児が当たり前を経験する外あそび、自然に触れる経験を保障することが重要だと考えている。特に、四季を通じて戸外であそび経験によって子どもたちの世界を広げたいという願いがある。

ただし、障害児施設における外あそび実践が容易なものではないということも、保育者たちは認識している。様々な障害のために弱さを抱えている子どもたちにとって、散歩にでかけ、日差しや風を感じることに、そのなかで草花や昆虫に触れること、また土や泥に触れてあそぶためには、保育者が個々の子どもの発達段階や状態に合わせ、意識的に用意しなければならないのである。なぜならば、健康上の問題から外に出ることに制限があるケース、感覚が過敏であるために土・泥に触れることを嫌がるケース、また、動きが大きく家庭ではなかなか散歩に連れて行けない、などの困難さを抱えている場合があるからである。

しかし、外あそび実践が容易ではないことを承知しつつも、子どもたちの発達を願い、自然に触れる経験を身近に味わってもらうため、C 施設では、まず、園庭にたっぷりの水と土を用意することにした。設立 2 年目である 2005 年の春、砂場の隣にブロックを並べて枠を作り、そのなかに譲りうけた畑の土を入れ、年間を通して土や泥であそべる「どろんこひろば」を作った。土場を作ってから 2 年目には、2 トントラック 1 杯分の畑の土を農園から購入して土の量を増やし、いつでも土の感触が楽しめるようにした(写真 1)。



(写真 1)「どろんこひろば」であそぶ子どもたち

(2) “どろんこあそび” 実践

①子どもの実践

C施設では、年間を通したあそびの計画に、いろいろな感触あそびを取り入れている。春先は、まず乾いた土に触り、暖かくなるにしたがって少しずつ水を混ぜていきながらあそぶ。また、手に持つと口で確かめることの多い子どもたちについては、寒天や小麦粉など食べられる安全な素材を用意し、“どろんこあそび”に移行できる準備をする。

素材の感触を楽しむあそびとしては、乾いた塊を手でにぎってつぶすことや、逆に少し水を入れて握ってみることで、山を作ったりたたいたり、でこぼこを作って裸足で歩いたりしている。また、暑い季節は、穴を掘って水を流し、子どもも保育者もみんなでそのなかに足を入れてあそぶ(写真2)。



(写真2) 泥の水たまりに足を入れてあそぶ

一方、感触そのものを楽しむだけでなく、全クラス合同で土や泥を運ぶあそびも取り入れている。「どろんこひろば」にはまだ抵抗があって入れない子どもでもあそびに参加できるように、園庭の真ん中(水道と土の真ん中でもある)に枠を作り、ビニールシートを敷いて浅いプールのような場所を設定した。そして、水道と土のある場所にそれぞれ起点となる保育者がつき、プールには着点になる保育者を配置し、子どもたちは起点から着点に向けて水や土を運ぶというあそびを実施した。水の好きな子どもは水道側からペットボトルやバケツで水を運び、反対側からは土を運んでくる子どもがいる。どちらも真ん中の浅いプールに運んだ水や土を入れ、泥の水たまりを作る。そこでは、水の感触は好きだけどどろんこは苦手という子どもが感触を楽しみ始める姿が現れる。また、重い土や水を繰り返し運んで、行き戻りする子どもたちの姿が見られるようになる。

これら“どろんこあそび”のなかで、特に子どもたちが繰り返し楽しんだのは、大きな穴にみんなでどんどん水を運ぶというあそび、設定したベニヤ板の斜面からお団子を転がすあそび、つるつるにした土の上をスライダーのように勢いよくすべるあそびである。単純なくいかえしのあそびがだんだん盛り上がるという感じであそびがふくらんでいくのである。

なお、手に持つと口で確かめることの多い子どもや、泥を見ただけで逃げ出すような汚れることを嫌がる子どもも少なくない。しかしながら、子どもたちの要求を引き出すあそびとして、“どろんこあそび”は、苦手な子どもでも経験するだけの価値がある、ということで保育者たちの考えは一致している。その考えは、これまでの実践の積み重ねから、“どろんこあそび”には、新しい経験や苦手なことにむかっていける力を培うのに適しているという実感と手応えに基づいている。そのため、保育者たちは、一人ひとりの子どもたちの得意なこと、好きなことを“どろんこ

あそび”のなかにとりこむ工夫を重ねながら、遊び方、導入、関わり方について試行錯誤を繰り返す。同時に、その子にとって楽しい、心地よいかかわりのなかで保育者との関係を丁寧につくり、その信頼関係を土台に“どろんこあそび”ができるようにしている。

②親の体験が子どもを変える

親子登園の際、子どもたちがどろんこになってあそんでいる様子を、一歩も二歩も引いて見ている母親たち。親たちもまた、水や土に触れること、季節を感じてあそぶという経験が乏しいため、その楽しさが実感できないのかもしれないのである。

そこで、クラス懇談会のなかで、「びかびか泥だんご作りに挑戦！」と題して、講師を呼んでの泥だんご作り体験に取り組んでいる。母親たちは見本の泥だんごを見て目を輝かせ、自分の泥だんごを作り始める。子どもが泥に触ることに否定的だった母親も、次第に自分の作品づくりに夢中になっていく。

泥だんご作りを母親たちが楽しむようになると、感触が苦手でなかなか触れなかった子どもが平気で触れるようになったりする。

親をはじめ、子どもに関わる大人が、あそびのなかで自然に触れる経験を日ごろから積み重ね、子どもたちに楽しさを伝えることの大切さが実感されている。

(3) “どろんこあそび”から見られる子どもの姿

触覚が過敏で絵の具や小麦粉粘土の苦手な子どもでも、土だと初めから抵抗が少なく、自分から手を伸ばしてさわってみるという場面に遭遇したり、毎日子どもも保育者も全身でどろんこになることで「あそんでいて楽しい！」という高揚感と一体感を味わい、生き生きとした表情が観察できたりなど、“どろんこあそび”には、特有の効果が実感されており、それは様々な形で観察されている。以下、C施設の保育者たちが観察した子どもたちの姿を述べる。

- 隣に子どもが座ると普段は逃げる子が、泥に足を入れて手でかき混ぜたりしている時は、隣同士くっついて座ることができた。
- 口に入れようとするのを頻繁に止めなければならなかった子は、座って足に重たい泥を乗せてあそぶ時や、歌をうたいながらテンポにあわせて泥をたたいている時には、口に入れることが少ないことに気づき、毎日遊ぶうちにすぐ口に入れてしまうという姿が減っていった。
- 重い土や水を繰り返し運んで、行きつ戻りつするあそびをするようになってから、給食を運ぶことができるようになった。
- 汚れることへの抵抗が和らいだ。散歩で地面に触れるようになったり、食事のときおかしに触れるようになるなど、受けとめられる手の感触が広がった。
- モノへの関わり方の変化が見られた（足から手へ）
- 大好きなあそびがひとつ増えた。登園するとまっすぐ砂場に向かうようになった。
- “どろんこあそび”を繰り返す中で、「やりたい」という気持ちをおとなに伝える姿ができて

た。また、自分で道具を運んでくるようになった。

- 友だちを頻繁に押ししたり、自分の頭を床に打ち付けていたダウン症の子どもが、保育者とどろんこになってたっぷりあそぶ日課をつくる中で、そのような姿がなくなった。
- 障害のため歩行が困難だった子どもが、あそびのなかで一輪車（農作業用）を使って土や葉っぱを繰り返し運ぶうちに、しっかりと地面に足をつけて歩く姿が増えてきた。（写真3）



（写真3）一輪車（農作業用）で運ぶあそび

これらの姿から、感覚の広がり、手や足などの身体的な発達、友だちとのかかわりに関する発達、生活習慣に関する発達、要求（意欲）の表出や高まりなど、多面的な発達が促されたことが示唆される。

（4）事例から見てくる子どもの変化

次は、C施設に通所する一人の子どもの事例を挙げる。そこで、“どろんこあそび”が子どもに与える影響をその経過を含め、全体的かつ詳細にとらえる。

事例「“どろんこあそび”を通して変わってきたAくん」

Aくん（障害名：自閉症、MR）2歳児

【療育歴】

1歳半のとき、保健所から紹介され療育グループにつながる。翌年4月、C施設に通所開始。

【通所当初の姿】

運動：歩行（+）両足とび（-）階段を一段ずつ登る

手指：描画では弧状の往復線 食事はピックに刺したものを食べる

フォーク、スプーンの使用（-）

言語・社会性：有意語（-）要求はクレーンまたは声を出す

呼名に対する反応（+）母子分離不安（-）

全体的には乳児期後半から1歳の力に向かっている段階。

① “どろんこあそび”を始めた頃

外に出てあそぶことは好きで、靴を見せると履かせてほしい、という感じで座ります。表情の変化が乏しく、園庭の滑り台をすべったあとに一瞬笑顔を見せますが、すぐに真顔になるAくん。遊具に誘えばこちらに来ますが、そのあと繰り返し自分から向かう、という姿はほとんどありませんでした。クラスの子もたちがたらいに水を入れてあそんでいると、さわってみたいような表情はうかがえるのですが、なかなか自分から来ませんでした。

そんなAくんに、私たち保育者は、まずは彼が「楽しい」と思えるあそびを見つけること、そのなかで楽しい気持ちをしっかり表現できることを大切にしたいと思いました。そして、そのことをおとなに向かって伝える力や「モットヤリタイ」と自分からあそびに向かう意欲につなげていきたいと思いました。

②お母さんとあそぶ

暖かい春の日、お母さんといっしょに園庭の「どろんこひろば」で遊びます。最初はしり込みしていたお母さんも、他のお母さんとおしゃべりしながら、土をスコップですくい、型に入れることや、湿った土をお団子にすることなど、手を動かしているうちに夢中になっていくようでした。そばにいたAくんは、最初、お母さんのとなりでしゃがんでいるだけでしたが、しばらくすると土を指で触るようになり、いつの間にかパラパラと乾いた土の感触を確かめるように何度も触っていました。園庭であそぶときは、滑り台を一度すべると、とことこと離れて行ってしまふことの多いAくんが、ずっと土を触っている姿に新鮮な発見をしたような気持ちでした。お母さんが楽しそうにあそべたことは、Aくんにとっていい刺激になったのかもしれない。

また、木陰でござを敷いての触れあいあそびやシーツブランコ、お散歩で堤防に出て歩くことや、堤防でのそり遊びなど、戸外でからだを動かすあそびもたっぷりとりくむなかで、お母さんが「先生、Aくんがよく笑うようになった。」と言った時、私たちも「そうだね、いい顔がいっぱい見られるようになったね。」と共感していました。

③水遊びからどろんこへ

Aくんの楽しいあそびは増えていきましたが、それでも「モウイッカイ」という要求はなかなか引き出せませんでした。台の上から保育者に向かってジャンプすることが大好きになった時も、「楽しいね！」と共感し、「モットヤッテ」と手を伸ばすかな」と期待していたら、じっと立ったままでした。Aくんから「モウイッカイヤリタイ」という表現はどのようにしたら出てくるのだろう、保育者のなかに、先が見えないなかで、楽しく遊ぶ経験を積むことが要求表現につながるのかという不安が出てきました。もう一度、Aくんが乾いた土を集中して触っていた姿を思い出し、年間計画の中に“どろんこあそび”を入れ、丁寧に取り組んでいこうと思いました。

もともと水に触ることも大好きだったAくん。どろんこを作る「どろんこひろば」まで、バケツに水を入れて何度も往復し、保育者が水を運びます。水道のそばには大きなたらいを置いて水を溜めました。水が出ているとAくんがやってきます。「わっしょいびっぴ！」と声をかけながら、Aくんも手を添えるとバケツを持って「どろんこひろば」に掘った穴までたどり着きました。勢いよく水を流し、また一緒に手をつないでたらいに戻ります。何度も穴に水を運んで、他の子

もたちは保育者と泥水の穴に足を入れてあそび始めました。

④「チョウダイ」のサイン

そんなあそびを何度か繰り返しているうちに、Aくんが水のところではなく、土のところに来ていました。一緒に裸足で土の上に乗る、どろんこの穴のなかに足を入れてみました。最初はこわごわ足を伸ばしていたAくんでしたが、穴のまわりに他の子もいっしょに座り、歌をうたいながら足をばしやばしやと動かしているうちに、リラックスしてきた様子でした。手に泥のお団子を渡してみると、受け取ってかたまりをくずし、「モウヒトツチョウダイ」という感じで手を出してきました。「チョウダイ、だよ。」と手を重ねてトントンと動かす仕草をそのたびに伝えるうちに、「チョウダイ」のサインで伝えてくれるようになりました。力をこめてこわすことが楽しくて、Aくんは何度もお団子を欲しがりました。壊れた瞬間、保育者の顔を見てにこっと笑うAくん。そのあそびはやりとりの楽しさにもなっていました。モノを介した三項関係の力が育ってきていることが感じられました。

⑤「モットアソビタイ！」

そのうち、朝登園すると、真っ先に「どろんこひろば」に行き、土のかたまりを探すようになりました。「朝のつどいが始まるからお部屋に入ろうね。」いつものように声をかけて、部屋に向かうよう促したとき、Aくんは「モットアソビタイ」とでも言うかのようにその場で大きな声を出して泣きました。自分の気持ちをそのように強く表現したのは初めてでした。

また、ある日、給食を食べた後、下駄箱から靴を出して職員のところを持ってきました。「えっ？ Aくんが靴を持ってきたよ。外に出たいんだね。すごいね！」クラス担任みんなで大喜びしました。「外に出たい」と初めて自分から伝えてきた姿からは、Aくんが自分の生活の主人公になり始めたことを感じました。

⑥まとめ

あそびのなかでなかなか自分から向かう姿がなかったAくんが、どろんこで遊ぶことが楽しくなり、毎日自分から「どろんこひろば」に行き、泥に触るようになったことは大きな変化でした。お母さんが最初に楽しくあそんでくれたことも、Aくんにとってはよかったと思っています。

また、大好きなあそびを通して周りに気持ちを伝える力をつけてきたAくんの大きな変化が感じられました。

さらに、給食でも、おかずに触ることが少なかったのですが、最近はいろいろなおかずに自分から手を出す姿が出てきました。生活のなかで全体的に手を使うことの少なかったAくんが、着脱でもパンツやズボンを自分で脱ぐようになりました。あそびのなかで受けとめられる感触が広がったことや、手をしっかり使ってあそんできたことが、生活のなかでの姿も変えていったのではないかと思います。

様々な感触が経験できる“どろんこあそび”のなかで、子どもたち一人ひとりの「自分から」という姿を大切に、楽しいあそびづくりを探っていきたいと思っています。

Aくんの事例からは、“どろんこあそび”を介することで、保育者との一対一の関わりの中で楽しさを積み重ね、ついには「モットアソビタイ」と泣いて主張するようになるなど、力強い要求が引き出され、確実に発達している様子が読み取れる。

力強い要求が出る前の段階では、泥だんごを受け取り手に力を込めてそれをこわすという好きなあそびを見つけ、そのあそびを通してやり取りの楽しさを味わい、その中で「チョウダイ」と意思表示することと、三項関係の力が育っていった。なお、三項関係とは、1対1の関係（二項関係）に対象物が加わり、「自分」と「他者」が同一の「対象」を見ていることを理解する。それは、人間が他者に共感したり、世界に思いを馳せるという営みの基礎である。

力強く要求が出せるようになった後は、自分の靴を保育者のところに持ってきて「外に出たい」ことを意思表示するようになったり、受けとめられる感触が広がり、それが生活の中で応用（食べ物にさわられるようになる）されるなど、さらに発達していく姿が確認できる。

このように、“どろんこあそび”は、子どもを一面的にはなく、心も体も全体的に発達させるのではないかと考えられる。

3. 分析

（1）発達的な視点から

C施設の“どろんこあそび”では、水を汲み、運び、土に水をかけて、戻ってくることや、すくっては移し、落ちた泥をまたすくうといった作業が中心である。それを田中昌人の階層一段階理論⁽¹⁾で説明すると、こまかい1次元可逆操作の調整と結合した1次元可逆操作だといえる。田中理論によると、幼児期の最初の段階（1歳半ごろ）には、1次元可逆操作の基礎である“……デハナイ……ダ”という、同じレベルの中で、2つのものを比較する力が出現し、行動では方向転換という形で現われる。つまり、泥を作るためには、「(他の物)ではなく水が必要だ」。水があるのは「(他の場所)ではなく水道だ」。水を汲むためには、「(他の物)ではなくじょうろだ。」というように、“……デハナイ……ダ”の複数の選択を調整しながらつなげていくことで、「水を汲み、運び、土に水をかけて、戻ってくる」という一連の行動になるのである。

そして、「1次元可逆操作段階を獲得すると、比較的自由に、自分なりのやりかたでこうしたことが展開できるので、水遊びや砂遊びが大好きです。これは誕生した自我が育つための遊びなのです。この時期の十分な経験が2歳ごろから始まる自我の拡大のもとになります。」⁽²⁾と述べられているとおり、“どろんこあそび”を通して外の世界にきりこみ、それを誕生した自我の内面にとりこんでいく。そして、それはやがて自我の拡大へとつながっていくのである。

自我の拡大の時期には、積極的に要求するという活動を始め、自分の前にひろがる世界を要求にもとづいて充実させ、さらに、他人からの要求に応じて自我を関与させて新しい世界を築いていく。

上記Aくんの事例では、「モットアソビタイ」と泣いて訴えるという要求が見られた。“どろん

こあそび”を通して誕生した自我が、拡大していったと考えられる。

さらに、その後の2次元形成期(2歳後半頃)には、能動的な遊びとして、大きな道具を使おうとするようになったり、素材を手で加工して「作品」をつくろうとするようになる⁽⁹⁾。具体的には、三輪車や箱車、スコップやバケツを両手で持って膝に力を入れて、足で運ぶ全身活動ができるようになったり、土を手で丸めたりたたいたりして「だんご」や「ホットケーキ」を作ることなどである。

このように、毎日C施設で、“どろんこあそび”にうちこむ子どもたちの姿は、新しい力の獲得に向けて挑戦している姿だと捉えることができる。“どろんこあそび”を、日々の療育のなかで保障していくことには発達の意義があるといえる。

(2) 土や泥の魅力と効果

“どろんこあそび”には、土や砂、水が必要であり、土や砂に水を加えることで泥を作る。ここでは、土や泥という素材のもつ魅力と効果を整理する。

①多様な感覚が味わえて、苦手な感覚をのりこえられる可能性をもつ

水を加えると泥になるなど、土は、重み、硬度、粘度、弾性、温度(ぬくもり)、ざらざら・なめらか、湿った・乾いたなど、質感を多様に変化させることができる。特に、寒天などほかの素材では出せない「つつまれる」ような感覚、ぬくもりが味わえるのが特徴である。変化に富む土・泥の性質が、多様な感覚刺激、特に触覚刺激を生み出す。それが、子どもの「センサー・ニーズ(sensory needs)」を満たすと考えられる。「センサー・ニーズ」とは、感覚統合療育の専門用語で、必要としている感覚刺激を満たそうとする自発的な行為の事である。人間には、好きな感覚があり、それをする事で落ち着く事ができる。感覚的な欲求を満たせるあそびを手がかりに、未熟さや苦手な感覚をのりこえるのである。C施設では、子どもたちが好む水を加えることで、泥や土にかかわりやすくなることが観察されている。

好きな触覚刺激を手がかりに、手を使って土や泥の様々な触覚刺激を体験するなかで、苦手だった感覚が次第に平気になり、それが日常生活の中で応用されていく。たとえば、上述したAくんの事例では、以前は食べ物に手を触れることができずピックに刺してしか食べられなかったが、“どろんこあそび”を始めるようになってから、手でおかずに触るようになったことが確認されている。

かつて哲学者カントは、「手は外部の脳である」と言った。人間は、手を使って自然物を加工し、さらに手の延長として道具を使いこなし、自らの生活さらには人類の発展に役立ってきた。手を使うということは、自らの生活を広げ、発達していくための基本的な行為であると考えられる。また、脳科学が発展した現在では、手から受ける様々な触覚刺激は脳に刺激を与え、脳の発達を促すことが段々と解明されつつある。

手から伝わる感覚刺激から受けとめられる感覚を広げることを皮切りに、手を使ったあそびが発展し発達が促されていくのではないかと考えられる。

②非日常性と解放感が味わえ、あそびきることができる

子どもはもともと泥を「汚れる」ものとしてとらえているわけではなく、大人が「汚れる」からと触るのを制止することで、「汚れてはいけないので、泥に触らない」ということを学習していく。「泥は汚れる」という先入観を持たない子どもたちは、どろんこになることに対して、非日常性と好奇心を感じ、感覚過敏の子どもを除き、存分にどろんこあそびを楽しむことができる。

全身泥まみれになってあそぶのが“どろんこあそび”の醍醐味なのであるが、一方で、清潔志向の高まりの中、大人（保育者も保護者も）は、“どろんこあそび”に抵抗感をもっていることが少なくない。そこでまず、C施設では、“どろんこあそび”の効果を最大限に引き出すため、大人（保育者や保護者）の価値観を変えるところから取り組む。C施設で保護者を対象に「泥だんごづくり」の体験講習会を開いているのはそのためである。

大人が「泥は、汚れるからダメ」という制限をかけないことが、子どもたちにとって“どろんこあそび”を十分にあそびきることにつながっていると考えられる。

また、“どろんこあそび”は、戸外でのあそびでもあるため、陽射しや風の心地よさなどを感じることができ、環境的にも解放感が味わえる。

③障害の種類や程度、発達段階にそれぞれ対応したあそびが展開できる（汎用性）

前述したとおり、土は、質感を多様に変化させることができるため、質の異なったあそびが何通りも展開できる。そのため、1次元可逆操作の獲得期にある子ども、2次元形成期にある子ども、どのような発達の段階にいる子どもでも、保育者の工夫があれば、その発達段階に合わせた“どろんこあそび”が展開できる。さらには、保護者が泥だんごづくりに取り組んだ活動からは、大人でさえも童心にかえり楽しむことができるあそびであることがわかる。つまり、障害の種類や程度、発達段階に対応したあそびを用意しやすいという特性（汎用性）が、土や泥にはあるのである。

④心とからだの全面的な発達が期待できる

土や泥は、目的を持って作られ遊び方が限定されるおもちゃや、トレーニングマシンとは異なり、一面的な発達を促すのではない。Aくんの事例からも読み取れるように、受けとめられる感覚の広がり、手や指の操作性、自我の拡大、社会性など、心もからだも同時に、そして全面的に発達させていくのではないかと考えられる。

4. 考察

以上、C施設の“どろんこあそび”実践から、障害のある子どもと“どろんこあそび”との関連について田中昌人の階層段階理論を活用して分析するとともに、天然の素材である土や水（泥）そのものの魅力や効果について分析した。その分析をもとに、自然保育の意義をまとめる。

（1）心もからだも豊かに育む

土や泥は、多様な感触が味わえ、質の異なった様々な遊びが何通りもできるため、障害の種類

や程度、発達段階にそれぞれ対応したあそびが展開できる。その中で個々の子どものもつ発達上の課題や弱さにアプローチしていくのである。また、“どろんこあそび”には、非日常性という特徴があり、子どもたちの好奇心をかき立て、存分にあそびきることが期待できる。

あそびの楽しさをたっぷり味わいながら、心もからだも全面的に発達させていくことができるという特徴があるのである。

(2) 自然とともに生きることは人間らしく生きること

土や泥に触れる体験は、身近な自然体験でもある。土や泥が天然の素材であることはもちろん、それらを使った“どろんこあそび”はたいてい戸外で行われるものであり、園庭内に植えられた木や花そして土そのものから季節ごとの自然（音・におい・色・気配等）を、五感を使って全身で感じながらあそぶ。

人間にとって外の世界とは、自然環境である。人間の基本的な営みは、外の世界にかかわり生きていくということである。子どもは、外あそび、“どろんこあそび”という体験を通してそのことを少しずつ体得していく。つまり、外あそび、“どろんこあそび”は、人間らしく育ち生きることと直結した活動だといえる。

障害を持った子どもだからこそ、人間らしく育ち生きていくことを保障することは、とても重要である。日々の保育のなかで自然との関わりを保障することには意義があるのである。

なお、人間は、自然の一部として存在している。そのことを認識し、自然とともに生きていくということは、現代社会に生きる大人たちにとっては、人間性の回復という課題であるといえる。C施設では、保護者に対して「泥だんごづくり」の体験講習会を開くことにより、自然（土）であそぶことの楽しさを伝えながら、自然に触れ合うことの大切さを伝え、保護者たちの価値観を変えようと試みている。大人たちが価値観を変え、人間性を回復していくことが、子どもたちの発達を促していくことにつながるのではないかと考えられる。

5. 今後の課題

C施設での“どろんこあそび”実践は、室内でのあそびが主流になりがちなのが国の障害児通園施設の中では貴重であるとともに、この実践は、わが国の障害乳幼児の療育、あそびづくりをより豊かなものにしていくために、重要な問いかけをもっているといえるのではないかと考えられる。この実践の意義を伝え、広めていくためには、下記のような実践課題と研究課題があると考えられる。

(1) 実践課題

若い保育者のなかには、自然に触れながら育ってきた経験が乏しい者が少なくない。そのため、自然を保育の中でどのように活用すればよいのかはもちろん、その楽しさなど、保育に自然を活用する意義についての実感や認識が乏しいと考えられる。若い保育者を中心に、いかに自然保育の楽しさやすばらしさを実感し、その意義を伝えていくかという課題がある。

さらに、この課題は、子どもの保護者（親）についても同様に言えることである。保護者（親）

に自然の意義を実感してもらい、施設（園）の中だけでなく、家庭など生活全般で自然に触れる機会を保障していくことも課題である。

さらに、どろんこあそびに使用する土は、園舎周辺の宅地化等により都市部はもちろん郊外でも入手が難しくなりつつある。自然の乏しい環境のなかで、いかに十分な土を用意して自然保育実践を行っていくかについての工夫が課題であるといえる。

（２）研究課題

今後の研究課題は、C 施設にだけでなく、幼稚園や保育所なども対象に、自然保育の実践記録の整理・分析を積み重ね、普遍化をする作業をしていく。同時に、「自然に帰れ」に象徴される J.J ルソーなどの自然保育に関する思想、既存研究の整理・分析を行い、自然保育の現代的意義の探求とともに、自然保育の理論化と実践を試みる。

【注】

(1)田中昌人が提唱した「階層一段階」理論は、「発達保障論」とも呼ばれる。糸賀一雄によって創設された障害児施設「近江学園」における療育実践と研究を基にして、人間発達と社会発展を統一的に論じた理論である。また、発達保障は、個人の発達の系、集団の発達の系、社会進歩の系という3つの系で構成される。詳細な「階層一段階」の概念については、「可逆操作の高次化における階層一段階理論」（田中昌人『人間発達の理論』青木書店、1987年）などの著作を参照されたい。

(2)田中昌人・田中杉恵『子どもの発達と診断3 幼児期I』大月書店 1984年7月 P37

(3)前掲書 P196

(吉田 幸恵 名古屋経営短期大学子ども学科 講師)

(稲垣 馨 発達センターちよだ 保育士)